

環境教育「まず、今できることから」

歴史に学ぶ

発行所：地域環境活性化協議会
編集者：代表幹事 高橋賢一
連絡先：市民活動支援センター
尾張旭市渋川町三丁目5番地7
(渋川福祉センター内)
TEL 0561-51-2878

もうすぐが長くやたら
からとおぼしみの替え歌
を番組で披露するのをや
めた。たまたま鳴人のカラス
の勝手しほ。志村けんか
歌い全国の家庭や学校で口
ずみされた歌である。
放送後特々しいのはひき
りなしの抗議の電話だった。
「あれがないと子どもが寝ない。
」子どもが泣いている。やないか
どうしてこれる。思う以上に心
をつかんでいた。志村さんが
著書「変なおじさん」で振り返っ
ている。

後のバカ殿などとも一九七〇年代
以来ずっと世代を超えた笑顔を
生み出してきたんだ。
子どもたちが泣いているではなか
あの子どもたちもたまたま声か
聞かせるようである。
志村さんが新型コロナによる
病気の闘いの末七十歳で亡くなった
内省的な人柄で知られ笑いには嚴
しく研究も稽古も怠らなかった。
好きなコントをやて死ぬまであいつは
バカでどうしようもない。と言われ
続けた。いじり書きしている。
売れても高いところには決して身
を置かない人でもあった。

けん玉 上手になったよ



けん玉を練習する子どもたち。尾張旭市の稲葉保育園で

尾張旭市 年長児が講師に披露

尾張旭市の稲葉保育園で、のとき同市に移住。五人兄
五日、年長児十四人が、四 弟の末っ子で、子ども頃
九月間練習してきたけん玉 は兄たちに負けないように
の腕前を、同市渋川町の講 けん玉を練習したという。
師高橋賢一さんのもとで、 今は毎朝二回、玉を乗せ
リズムカールに披露した。 リズムに乗せての自信が付
高橋さんは同市に地域環 くることを習慣にしており、
境活性化協議会を設立し、 「出来具合で体の調子がわ
る。東京都出身で二十八歳 かる」と話す。
年の愛知万博の会場で子ど

もや外国人にけん玉を教え
て好評だったことを機に、
市内の保育園で指導を始め
た。同園では昨年十一月か
ら月二回訪れ、「体をほね
のように使ったよ」など
と教えてきた。
園児たちは毎日、給食を
食べたあとに、準備体操を
してから十分間練習。全員
が玉を乗せられるようにな
ったという。この日は膝を
屈伸させて全体でリズム
を取りながら、童謡「うさ
ぎとかめ」に合わせて練習
の成果を披露。二つの皿に
交互に乗せ替える技を高速
でやってみせる園児もあり
「すごい」と教室をざわ
めかせた。
豊田久美子園長は「汗だ
くになりながら練習した。
運動が苦手な子どもでも
ようになったので自信が付
いたはず」と笑顔。岸田輝
奈ちゃん(六)は「いっぱい
練習してできるようになっ
てうれしかった」とはにか
んだ。(西川侑里)



柿の収穫が終わる木に、
ほんとと実が成るま
のじりりとした音は
いっせいに静かにな
らう。それは木まも
りというのと白洲正子の
随筆が教わった。
来年はもっと実をほ
いといっせいに静か
な音は、自然に對する
一種の礼節ともなら
実も葉もひらひらと
あどけなくおしりし
うと想像した人間のや
しい思いやりのすま
見える。秋の青い空
小さな朱色に、正子
心引かれた。
正園子規は食いん坊
で柿も好物だったか
にへ柿へば……んま何を
生んだ。

奈良の箱で山盛
りの柿を食べてした
う鐘が鳴る音が
聞こえたと随筆
にある。
「ものごとにはね、心
で見なくては
よ。見えないう
げんたいせつな
ことは目に見
えない。
」(正子の「まきまき」
(ササキカズヨシ)
の有名な一節)



稲葉保育園の5歳児に修了証を
授与する。